筑紫女学園大学リポジト

存在と所有　：　カテゴリー分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-02-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/508

存在と所有―カテゴリー分析―

緒　方　隆　文

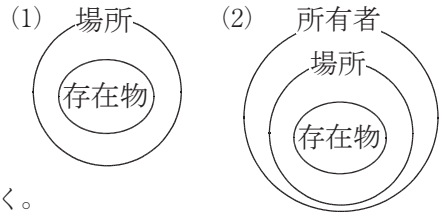
A Categorical Approach to Existential and Possessive Constructions

Takafumi OGATA

1．はじめに

本稿は、英語の存在表現と所有表現について考察する。具体的には、There 構文、場所格倒置構文、Be 存在文、Have 構文を見ていく。このとき、カテゴリー分析を行う。各々の構文が、カテゴリー構造によって特徴付けられ、構文の適否が定まるのを示すことを目的とする。

存在には、＜場所＞と＜存在物＞が必要である。これをカテゴリーと成員の関係に置き換える。つまり(1)のようにカテゴリーが＜場所＞、成員が＜存在物＞と考える。存在は、カテゴリー構造をなすと見なす。(1)を存在構造と呼べば、所有は(2)のように存在構造を所有者が含み込む構造をしていると考える。議論が進むにつれ、他の要素が加わったり、より精緻化されていくが、基本的な考えとしては、所有と存在は連続しており、カテゴリー構造をなすと見なしていく。



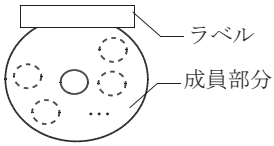
There 構文は緒方(2015)で扱っており、そこでの結論は「There 構文が(1)のカテゴリーの情報を、聞き手に新情報として提示する構文」であると論じた。その概略をまず示していく。次に場所格倒置構文も There 構文と同様、存在構造に関わるカテゴリー情報を、聞き手に新情報として提示する構文であることを示す。このとき虚辞の there がないため、制限がややきつくなる場合がある。Be 存在文については中右(1989)を踏襲し、提示型と話題型に分けて考察する。そして各々のスキーマを提示することで、Be 存在文の適否を示していく。最後に Have 構文では、所有の意味も含め、動詞 have が持つ意味を、存在のスキーマと所有のスキーマの２つに分類する。これらの表現を見る前に、カテゴリー及び、存在表現・所有表現についてまず２節・３節で見ることとする。

2．カテゴリー

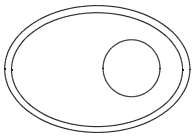
まず本稿でのカテゴリーの考え方を示したい。カテゴリーは、何らかの理由で成員がグループ化されたものを指す。カテゴリーにはラベルがついており、それが何かを指し示す((3))。カテゴリーには様々なものがあるため、成員とカテゴリーの緊密度は、カテゴリーによって異なる。カテゴリーと成員の結びつきは、大きく３通りあると考える。それを図示したものが、(4)になる。(4a)はカテゴリーが成員と強固につながる関係(二重線)、(4b)は通常の関係(一重線)、(4c)はかなりゆ

るい関係(破線)を示している。この緊密度の違いが、統語的なふるまいの違いを生み出していく。

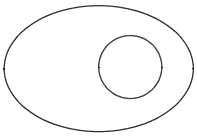
(3)



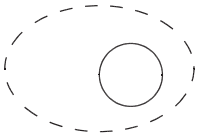
(4) a.



b.



c.



また成員には、属性などの抽象成員と、個体など具象成員がある。これらは一つのカテゴリー内に混在していると思われるが、用法によって、抽象成員または具象成員のどちらかが前景化される。(3)では成員の内、前景化されるものが実線、背景化されるものを破線で表してある。さらには成員は変項を持つ場合がある。変項は、西山(1994 他)が存在文の分析にも用いた概念で、値が定まらない要素をさす。いくつかの構文がこの変項を持つことを示していく。

3．存在表現と所有表現

中右(1998:55)は、存在と所有を表す表現として(5)-(9)をあげている。(5)をはだか存在文、(6)をthere存在文、(7)をhave存在文、(8)をhave所有文、(9)をhave経験文として分析を行っている。

(5) a. Some maps are on the table. b. In the Andes are condors.

(6) a. There are some maps on the table. b. In the garden there are some squirrels.

(7) a. The table has some maps on it. b. John has a calculator on him.

(8) a. Mary has only one parent. b. Jim has two fax machines.

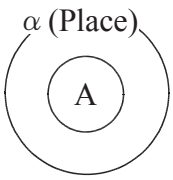
(9) a. Martin has a child sick in bed. b. Ann had an extraordinary thing happen to her.

本稿ではカテゴリー構造の観点から、次のように分類しなおす。(5a)をBe存在文、(5b)を場所格倒置構文*[1]、(6)をThere構文、(7)(8)(9)をHave構文とする。Have構文は(7)(8)(9)以外の意味も含めて、存在のスキーマと所有のスキーマに二分し分析を行う。以下構文ごとに見ていく。

4．There構文

There構文は、存在に関する情報を新情報として聞き手に提示する構文である。緒方(2015)では、これをカテゴリーを通して分析した。そこでの結論は「There構文とは、特定の成員を含むカテゴリーが存在し、それに関わる情報を、聞き手の新情報として、話し手が提示する構文である」とした。つまりThere構文は、(10)に関するカテゴリー情報を、聞き手に新情報として提示する。(10)は場所カテゴリーαに、成員Aが位置することを示す存在構造になる。

(10)

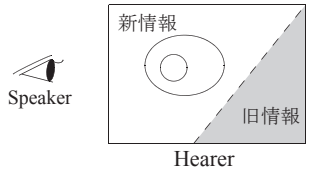


緒方(2015)では、There構文に生起する動詞、意味上の主語名詞句、定性制約などの制約を、スキーマを通して考察した。ここでは他構文との比較のため、There構文のスキーマのみを概観することとする。

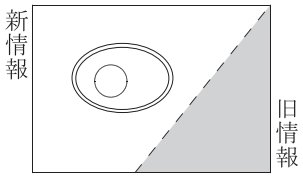
There構文は、存在構文であることから、何かが、ある場所に位置する。これをカテゴリーで表すと(10)になるが、それだけでは提示文であることを示すことができない。そのため新情報・旧情報という情報を加えることとした。(11)はThere構文の代表的なものになる。(10)のカテゴリー

構造が、新情報として提示されるスキーマになる。(11)では、存在構造(10)が聞き手の新情報に位置している。(11)と似たスキーマに、主語名詞句に定性表現が現れるものがある。通例 There 構文では定性表現がつくと不適格になる。しかし後置修飾語(of 前置詞、関係節、同格節)や前置修飾語(最上級や same, only, very などの表現)が現れると、定性表現が現れる。これはカテゴリーと成員の緊密度が関わるためで、通常のスキーマ(11)ではなく、(12)になっていると考える。つまり緊密度が高まり、定性表現をとることになる((12)では二重線で示されている)。

(11)



(12)



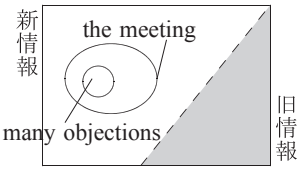
(12)のようにカテゴリーの緊密度が変わるだけでなく、それ以外のスキーマもある。例えば(13b)のように変項を含む場合がある。(13a)(13b)では、新情報が異なる。安藤(1991:397)では(13a)では文全体、(13b)は主語名詞句のみが新情報と述べる。つまり <at the meeting> の位置により、何が新情報かが異なってくる。

(13) a. There developed many objections at the meeting.

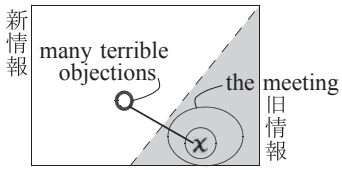
b. There developed at the meeting many terrible objections. (Milsark 1974:248)

(13a)には変項がなく、(13b)には変項があると考えれば、この違いが説明される。(14a)では成員とカテゴリーの両方が新情報に位置する((13a))。変項はない。そのため文全体が新情報として提示される。一方(14b)ではカテゴリーと成員は旧情報にあり、成員が変項となっている。変項の値である主語名詞句(many terrible objections)のみが新情報になる((13b))。会議で何があったかというと、many terrible objections だと述べている。主語名詞句が後置されたため、焦点が変わり、この意味になったと考えられる。このように変項を用いることで、スキーマの違い、ひいてはどれが新情報かということを示すことが可能となる。

(14) a.



b.

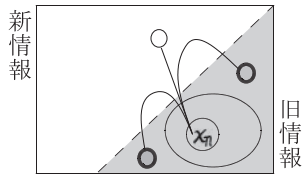


さらに変項を用いるものに、(15)のようなリスト存在文がある。質問の答えや、分からなかったものを、リストとして主語名詞句で提示する。ここでは主語名詞句が変項(x_n)となっており、n 個の値と変項が結びつく。値そのものは、旧情報にあっても、新情報にあってもよい。新情報は、値と変項を結ぶ線(リンク)になる。いわば関係づけが、新情報となる。通常の There 構文では、成員または変項の値のいずれかが新情報になるが、リスト存在文の場合、モノではなく関係が新情報になっている。

(15) A: What's worth visiting here?

B: There's the amusement park, nice restaurants on the beach, and the museum on the wharf. (熊本 2001:112)

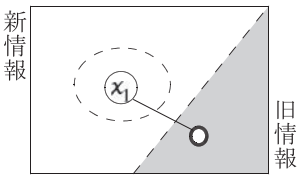
(16)



最後に場所表現が現れないことが多い(17)のような実在文がある。これは(18)のスキーマを持つ。

(17) a. There is a God.
b. There was a sudden noise. (Quirk *et al.* 1985:1406)
c. There is a Santa Claus.

(18)



新情報に、カテゴリーと成員の両方があるが、カテゴリーと成員との結びつきは弱い(破線)。そして成員が変項(x_1)となっている。変項は、1個の値と結びつく。値は旧情報、新情報どちらでもよい。変項の値に焦点があたるため、場所表現は現れないことが多い。

以上、There構文のスキーマのみを概観した。ここで述べていることは、存在表現はカテゴリーの存在構造に置き換えることができ、There構文においては、新情報・旧情報を組み込むことで、生起する動詞、意味上の主語名詞句、定性制約などを説明することができることにある(cf. 緒方2015)。このカテゴリー分析を、他構文にも応用していく。

5. 場所格倒置構文

場所格倒置構文は、There構文と同じく聞き手に存在に関する新情報を提示する。動詞には(19)のように存在・出現を表す動詞が現れ、それ以外の動詞は(20)のように不適格となる。

(19) a. Among the guests was sitting my friend Rose.
b. Onto the ground had fallen a few leaves.
c. Into the hole jumped the rabbit.
d. Toward me lurched a drunk.
e. On the corner was standing a woman.
(Bresnan 1994:78)

(20) a. *With great care walked John into the room.
b. *Despite the cold ran Mary into the room.
c. *On his bicycle appeared John (in the classroom).
d. *At 10 o'clock arrived the train. (Coopmans 1989:735)

存在・出現を表す動詞は非対格動詞であることから、There構文同様、場所格倒置構文も非対格動詞に限定されると述べられてきた。しかし非能格動詞など、非対格動詞以外の動詞であっても適格な例が存在する。

(21) a. Into the room ran John.
b. Out of the room walked John. (Iwamoto and Kazuki 1996:2)

そのため非対格動詞に限定されるのではなく、意味に限定されると考えるのが自然である。緒方(2015)のThere構文の分析でも述べたが、存在と出現のスキーマは、各々(22a)(22b)のようになる。(22a)は単に存在を表し、存在動詞が現れる。(22b)は出現動詞のスキーマで、結果として存在することを表す。つまり出現動詞であっても、結果として成員がカテゴリー内に存在する。そのため大切なのは、純粋に存在でなくても、存在の意味がはっきりと感じられることである。よって存在ではなく、行為の意味が強くなると不適格となる。(23b, c, d)は、(23a)にagentiveな副詞voluntarilyが付加され不適格となっている(例はIwamoto and Kazuki 1996:2)。存在ではなく、活動・行為の方に焦点があたるから不適格になると考えられる。

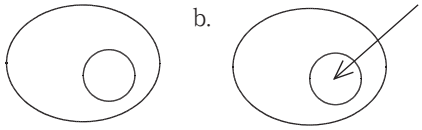
(23) a. Into the room ran John.

b. *Voluntarily into the room ran John.

c. *Into the room voluntarily ran John.

d. *Into the room ran John voluntarily.

(22) a. b.



一方、場所格倒置構文に状態受動態が現れる。これは結果として存在の状態があるからである。

(24) a. Among the guests of honor was seated my mother.

b. In this rain forest can be found the reclusive lyrebird.

c. On the table has been placed a tarte Tatin. (Bresnan 1994:78)

このように場所格倒置構文は、There 構文と同じ特徴を持つ。それは There 構文同様、聞き手に存在の新情報を提示する構文だからである。そのため、スキーマは There 構文と同じと考える。

ただし There 構文より制限が厳しいものが一つある。それは存在・出現の意味を表しても、他動詞が不適格になる。There 構文では存在・出現の意味があれば、他動詞であっても適格となったが、場所格倒置構文では、他動詞は基本認められない。これは虚辞の there がないからと考える。つまり虚辞の there がないために、他動詞は存在・出現と解されずに、行為と見なされがちとなる。そのため、他動詞構文は(25b)のように不適格となる*[2]。場所格倒置構文は、There 構文とは若干異なるが、同じスキーマを基本とし、似た特性を持つ。

(25) a. Archeologists recovered sacrificial burials from this trench.

b. *From this trench recovered sacrificial burials archeologists. (Levin and Hovav 1995:223)

6. Be 存在文

中右(1998:61, 62)は、Be 存在文をはだか存在文と呼び、提示型と話題型の２種類があるとする。そしていくつか制約が課せられるとした。１. 提示型と話題型の両方に働く制約として有形主語条件、２. 提示型だけに働くものとして有限主語条件、３. 話題型だけに働くものとして定主語制約があるとする。

提示型と話題型の両方に働く有形主語条件では、「主語名詞句は、有形の実体(具象的実体)を指し示さなければならない」(中右 1998:66)。そのため(26a)は適格で、有形の実体をもたない(26b)は不適格となる。(26b)の law は無形だからである。

(26) a. {The/Some} snow is on the roof.

b. *{The/Most/All the/Some} ridiculous laws are in this state. (Milserk 1974:221)

次に提示型のみにかかる制約、有限主語条件では「主語名詞句の指し示す実体は、数量的に限定された(quantitatively bounded)ものとして解釈されなければならない」(中右 1998:61)。提示型の場合、(27)のように主語名詞句は数量的に限定される必要がある。

(27) a. Many people were at the party.

b. Many people weren't at the party. (Akmajian and Heny 1975:260)

さらに話題型のみにかかる制約、定主語制約では「主語名詞句は定性の限定詞によって限定されていなければならない」。定性の限定飼として「①定性数量詞(most など)、②定冠詞(the)、③数

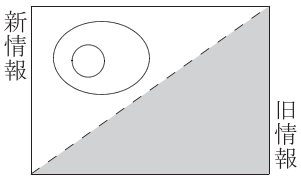
量詞と定冠詞の組み合わせ(all the など)、④強形の不定数量詞(some と many)、⑥総称的ゼロ冠詞 + はだか複数形など」がある(中右 1998:62)。(28)はその例になる。

(28) a. {The/All the} students were in the corridor.

b. Some students were in the corridor. (中右 1998:60)

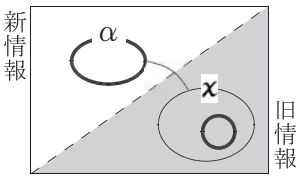
こうした制約をカテゴリーの観点から考察する。具体的には、提示型は(29)、話題型は(30)のスキーマ構造を持つと考える。

(29)



提示型

(30)



話題型

スキーマごとに見ていく。提示型スキーマ(29)は、There 構文や場所格倒置構文と同様、提示文のスキーマになる。つまり存在構造に関わる情報が新情報として聞き手に提示される。<具象の存在物が、特定の場所にあること> を聞き手に新情報として提示する。定性の限定詞は旧情報になるため、提示型スキーマには現れない。存在物を新情報として提示できなくなるからである。そのため、話題型に課せられる定主語制約は、提示型には課せられない。

ここで提示型(29)は、話題型(30)ではないことを聞き手に示す必要がある。つまり提示存在文と分からなければならない。そこで有限主語条件が必要になる。Be 存在文の両方にかかる有形主語条件により、限定詞がつかない形は、Be 存在文では認められない(理由は後述)。そのため名詞の前には必ず何らかの表現が必要である。しかし定性の限定詞を用いれば旧情報を表し、話題文になってしまう。そのため数量的に限定する表現を付加し、それが新情報に属することを示す。そもそも物理的場所に有形の実体が存在するためには、数量が限定されていなければならない。物理的場所に、無数の具象物が存在できないからである。そのため数量が限定されていることを示すことで、存在構造と矛盾しないことを示している。

次に話題型スキーマ(30)では、話題文であるため、まず成員となる具象存在物は旧情報に位置する。これら具象物が旧情報に位置することを示すために、定主語制約が働く。定性の限定詞がつくことで、存在物が旧情報に位置することが分かるからである。しかし存在の情報すべてが旧情報に位置すると、伝える内容がなくなってしまう。そのため変項があると考える。つまり対象が存在する場所はどこか(x)というと、新情報にあるこのカテゴリーであると述べることとなる(スキーマ(30)を参照)。このとき変項の値はカテゴリー α になる。

最後に、提示型と話題型の両方に働く有形主語条件を考察したい。Be 存在文の場合、There 構文における虚辞 there、場所格倒置構文における語順のようなものがないため、存在文と分かりにくい。そのため典型的な存在、すなわち、物理的場所に、有形の実体が存在することが要求される。抽象的なもの、無形のものでは、存在を表していることが分かりにくいからである。何かが物理的場所に存在するには、場所というカテゴリーの中におさまる具象物でなければならない。抽象的であったり、無形であれば、物理的場所におさまることができない。そのため有形であることが求められる。これは Be 存在文でのカテゴリー成員(主語名詞句)にかかる制約になる。中右(1998)が述べるように、Be 存在文は「視知覚領域に属する実体の存在を記述する様式である」。存在する成員

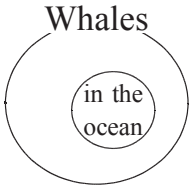
は、具象物になる。

なお中右(1989)が定性の限定詞として含めていた<⑥総称的ゼロ冠詞＋はだか複数形>は、ここから外したい。総称的はだか存在文として、中右は(31)のような例を挙げている。

(31) a. Whales are in the ocean. c. Objects are in space. (中右 1989：59)
b. Condors are in the Andes.

これは(30)のスキーマに属さない。というのもこれらは総称文であって、いわば属性を表している。例えば(31a)で言えば、whales の特徴の一つとして、in the ocean があるのであって、物理的な場所、もっと言えば一時的な状態として、記述しているわけではない。Whales の属性の１つなのである。カテゴリー構造としては、存在構文の逆の(32)の構造を持つと言える。そのため中右が言う総称的はだか存在文はここには含めないこととする。

(32)



７．Have構文

have は所有だけでなく、(33)に示すように多様な意味を持つ*3。この多様な意味は、have 自身が持つというより、主語や後続する表現によって定まる。つまり have そのものの意味は、無色に近く、単に「関わる」という意味を持つと本稿では考えていく。後続する表現には、名詞句のみの場合(目的語)と、小節構造(目的語＋α)を持つ場合がある。((33a, b, c, d, g, h))は分類名も含めて一條(2012:178), (33e, f, i, j)は Ritter and Rosen(1993:296, 309)<一部重複した例文もある>)。

(33) a. John has two cars.［具体物所有］
b. John has no mercy.［抽象物所有］
c. This table has four legs.［全体－部分］
d. John has a sister.［人間関係］
e. John has blue eyes.［固有の特性］
f. John had a party.［出来事名詞］
g. The table has a book on it.［空間的近接関係］
h. He has a gun with him.［所持］
i. John had the students read three articles.［使役］
j. John had his car stolen.［経験／受け身］

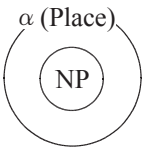
(33)を一つずつ見ていく。(33a, b)は所有表現になる。(33a)が具象物の所有で、譲渡可能な所有(alienable possession)になる。一方 (33b)は抽象物の所有になる。(33c)は主語と目的語が、全体と部分の関係になっている。(33d)では人間の主語と、目的語が何らかの人間関係があることを示している。これは譲渡不可能な所有(inalienable possession)になる。(33e)は、主語の固有の特性を目的語が表している。(33c)と似ているが、(33e)では目的語が属性を表している点で異なっている。(33f)は出来事名詞が目的語にくるもので、進行形になったり、what happened was の構文になれることから、状態ではなく出来事を表すとされている(Ritter and Rosen 1997:303)。(33g, h)は偶発的な位置関係を表す。(33g)が空間的近接で主語が無生物、(33h)が所持を表し主語が有性物になる(cf. 一條 2012:178)。(33i)は使役構文になる。(33j)は主語が Experiencer の受け身構文になる。(33j)タイプでは目的語の後ろに形容詞、過去分詞、現在分詞、はだか不定詞が現れる。

本稿は、これら Have 構文が、共通のカテゴリー構造を持つとする。具体的には、対象が二重のカテゴリーに包含される。そしてカテゴリーの緊密度の違いによって、大きく２つのスキーマがあり、スキーマの種類に応じてさまざまな振る舞いが説明されると考えていく。

have のカテゴリー構造を考えるにあたって、出発点として、存在と所有の関係を考えたい。存在と所有は互いに関連していると指摘されてきた。しかし存在文は自動詞文で、所有文は他動詞構文になる。とる項の数が異なっていて、違いは大きく見える。それにも関わらず、関連性が感じられるのは、所有構文が存在の意味を含み込んでいるからである。所有とは、対象がある場所(通例所有者)に存在することを前提にしている。その存在に、所有者(主語 NP)が関わることを示すのが所有の have である。

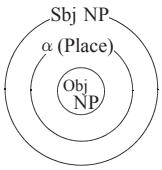
こうした考え方は、従来の研究にもあり、例えば竹沢(2003:62)でも所有構造は存在構造に重なった階層構造としている([所有 所有者[存在(場所)対象]])。竹沢は日本語の分析において述べているが、これは英語の所有の Have 構文においてもあてはまると考える。つまり Have 構文は、存在構造を含む複文構造になっていると考える。統語的には存在構造の部分が小節になっている。存在構造を示したものが(34a)である(=(1))。(34a)では、対象が場所に含まれる。言い換えれば位置することを表している。場所には抽象的なものも含まれる。(34b)は所有構造を示している。所有者が存在構造(34a)を含み込んでいる。つまり何かがある場所(通例所有者)に存在していること(存在)に、所有者が関与していること(所有)を表している。これをより一般化したものが、(35)になる。(35)では場所カテゴリーの中に、存在対象物(目的語 NP)が成員として存在し、主語 NP が包含する形で、存在構造に関与していることを表している。この関与には所有以外の意味も含まれる。

(34) a.



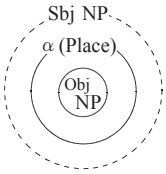
b.

(35)

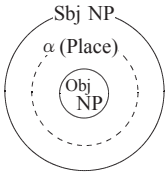


以下、Have 構文のカテゴリー構造は(35)が基本になると主張する。(35)は、存在と関与の２つの部分から成り立っている。そのため実際には、存在に焦点をあてた用法と、関与に焦点をあてた２つの用法が存在することになる。前者の存在に焦点があたるものが、(36a)になる。関与カテゴリー(一番外:主語 NP)と対象(存在物)の関わりが弱くなっており、破線で示されている。存在に力点が置かれることから、存在のスキーマと呼ぶ。もう一つは関与に焦点をあてた(36b)がある。これは場所カテゴリー(内側のカテゴリー)と対象(存在物)の関わりが弱くなっており、同様に破線で示されている。関わりに力点が置かれており、その代表的なものが所有であることから、これを所有のスキーマと呼ぶ。このように２つのカテゴリーと成員の緊密度の違いにより、大きく２つに分類される。

(36) a.



b.



場所には物理的な場所だけでなく、抽象的なものも含まれる。同時に、対象自身も具象的存在物と抽象的存在物がある。さらにはこれらスキーマを発展させたものもある。以下、この２つのスキーマに分けて、(33)で分けた意味がどのようなカテゴリー構造を持つかを示していく。なお Have 構文は話題文であるため、There 構文のように新情報・旧情報の枠を入れて考察する必要はない。

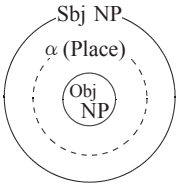
７．１．所有のスキーマ

まず所有のスキーマから見ていく。(33)であげたもので、(33a, b, c, d, e)がこのスキーマに入る。

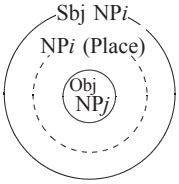
(37)に再掲する。このとき所有のスキーマは(38)(=(36b))になる。所有(関与)を伝える構文であるため、物理的場所は、表現として現れない。場所と対象の緊密度は弱い。

(37) a. John has two cars.［具体物所有］(=(33a))
b. John has no mercy.［抽象物所有］(=(33b))
c. This table has four legs.［全体－部分］(=(33c))
d. John has a sister.［人間関係］(=(33d))
e. John has blue eyes.［固有の特性］(=(33e))

(38)



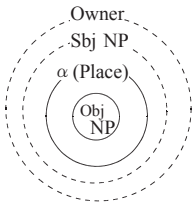
(39)



(37a)の具体物所有から見ていく。これは主語NPが具象物を所有する*4。このときスキーマは(39)に示すように、場所カテゴリーは主語NPとなる。主語カテゴリーと、場所カテゴリーが同一指標の i で示されている。つまり抽象的な場所(主語NP)に対象物が存在することに、主語NPが関与していると述べる。言い換えれば、場所カテゴリー(主語NP)の成員として具象物が存在し、その存在構造に主語カテゴリー(外側のカテゴリー)が関与する。

この具体物所有と似たものに<賃貸関係による一時的所有>がある。これは主語NPが真の所有者でなく、他から借りるなどの場合になる。(40a)では実際の所有者は[I]で、[you]が一時的に所持している。しかし(40b, c, d)にあるように場所表現をとることから、これは所有文ではなく、存在文と分かる。つまり存在のスキーマに属する。そのため(42)に示すように借りているのに、持っていないという表現が可能となる。スキーマは、存在のスキーマをもとに(41)のように展開させたものになる。(41)では(36a)の外側に、所有者カテゴリーがある構造になる。そのため具体物所有とは異なる。

(41)



(40) a. You still have my umbrella.
b. You still have my umbrella with you.
c. You still have my umbrella in your hand.
d. You still have my umbrella in your car.（中右 1998:89）

(42) John owns an umbrella but Mary has borrowed it, though she doesn't have it with her.
（中右 1998:88）

次に(37b)の抽象物所有であるが、具体物所有と基本同じになる。目的語NPが、具象物から抽象物にかわるだけで、スキーマも同じ(39)になる。存在よりも、所有(関与)に焦点が当てられており、対象が抽象物であろう具象物であろうと、スキーマの観点からは何の変わりもない。

このことは(37c)のような全体－部分にも当てはまる。ここでは全体－部分の関係になっているので、主語NPにとって譲渡不可能なものが目的語NPにくる。主語NPは物理的な場所として機能しているのではない。主語NPが、抽象的な場所カテゴリーとして、部分を成員として持ち、それと同時に、存在構造(全体－部分の関係)に関与していることを示している。そのため(36a, b)と同様に、(39)のスキーマになる。

また人間関係(37d)や固有の特性(37e)を目的語にとるものも、所有スキーマに属する。これら目的語は、物理的存在としてではなく、抽象的存在物としてとらえられる。(37d)で言えば、a sister

は物理的実体ではなく、そうした関係を持つものであり、より抽象的存在として考えられる。(43a)が(43b)と同じ意味になると考えられる(Landman 2004:198)。

(43)　a. John has a sister.　　b. Someone is sister to John.

物理的存在というより、抽象的関係を意味している。実際、この意味で have を possess や own に置き換えることができない。そのため物理的場所に、具象物を所有している訳ではない。いわば主語を特徴付ける特性の一つとなっている。(43b)では、John に sister の関係にある存在を属性として持っていることを意味している。

このことは(37e)の固有の特性にも当てはまる。(37e)では John が青い目という属性を持っていることを示している。ここでもまた物理的存在として、青い目を持っていると述べているのではない。あくまで＜青い目＞は属性として、主語 NP と関わりを持っている。

そのため人間関係であれ、固有の特性であれ、主語 NP を物理的場所として表現したり、関係を明記するような表現がつくと不適格になる。というのも(39)にあるように NP(Place)には、抽象的場所として、主語 NP がカテゴリーラベルとして定まっている。抽象的な場所ではなく、関係を表したり、物理的場所としての表現は，抽象的場所カテゴリーと矛盾が生じてしまう。

(44)　a. *John has a sister to/of him.

　　b. *John has blue eyes on/of/to him. (Ritter and Rosen 1993:312)

しかし一見すると場所表現の in Japan がつき適格となる(45a)のような表現がある。だが(45a)は(45b)の意味と考えられる。つまり in Japan は場所と言うより、息子の属性として機能している。もし、in Japan を場所として適格とする場合には、もはやそれは人間関係ではなく、存在のスキーマに属する解釈である。よって人間関係の意味では、場所表現は共起しない。

(45)　a. He has a son in Japan.　　b. He has a son living in Japan.

以上見てくると、所有スキーマは、存在物が具象物であっても抽象物であっても、どちらも抽象的存在物として扱われることが分かる。その存在構造に、主語 NP が関与することを表現している。

この関与には制限がかかる。関与していることが分かりやすく想定されなければならない。つまり主語 NP が、成員である対象と何らかの関連性を想起させるものでなければならない。関連性が見いだされない場合、不適格となる。(46a)では主語 NP と目的語が、雇用者－使用人という関係が容易に想起されるが、(46b)では主語と郵便局員との関係が想起しにくく不適格となっている。

(46)　a. He has three servants.　　b.*We have a postal worker.（一條 2012:183）

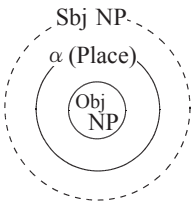
もっとも(47)のように文脈を整えてやれば適格となる。

(47)　I'm so happy we have a postal worker here to confirm this.（インターネット）

7．2．存在のスキーマ

次に存在のスキーマを見ていく。(33)であげたもので、(33f, g, h, i, j)がこのスキーマに入る。(49)に再掲する。スキーマは(48)(=(36a))になる。存在を伝える構文であるため、場所表現は現れるのが基本となる。所有のスキーマと比べると、場所と対象の緊密度は強くなっている。

(48)



(49)　a. John had a party.［出来事名詞］(=(33f))

b. The table has a book on it.［空間的近接関係］(=(33g))

c. He has a gun with him.［所持］(=(33h))

d. John had the students read three articles.［使役］(=(33i))

e. John had his car stolen.［経験 / 受け身］(=(33j))

まず(49a)の出来事名詞であるが、カテゴリー構造は(48)になる。出来事名詞であるため、進行形になったり、what happened was の構文になれる。場所表現は表現されることも、されないこともある。場所表現があれば、それが場所カテゴリーのラベルとなり、なければ主語カテゴリーと同一指標のラベルが、場所カテゴリーのラベルとなる。この時、場所は抽象的な場所になる。

次に空間的近接関係(49b)と、所持(49c)を見る。これらは偶発的な位置関係を表し、主語が<空間的近接> においては無生物、<所持> においては有性物になる(一條 2012:178)。スキーマは同様に(48)になる。場所カテゴリーは、主語カテゴリーと同一指標のカテゴリーがくる。ただし所有スキーマとは異なり、この場所カテゴリーは物理的な場所であり、実体を持つものとして認識される。具象物が物理的な場所に存在することを述べる構文であるため、場所表現が必要となる。主語 NP は、対象物に強く関与しているのではなく、存在する場所として機能している。有性物主語の所持の方が、無生物主語の空間的近接よりも、やや強く存在構造に関与している感はあるが、それでも主語 NP はどちらも単なる位置として機能しており、その存在構造に主語 NP がゆるやかに関与していることを示している。

次に(49d)の使役構文であるが、これは(48)の特殊なものになる。具体的には、場所カテゴリーが <活動> となっており、抽象度が増している。(49d)で言えば、<the students> が成員となり、場所カテゴリーは活動 <reading three articles> になっている。つまり活動を抽象的な場所と見なす。これは物理的場所からの比喩によって、応用されたと考える。

物理的場所であれば、例えば人は <東京> <神戸> <福岡> など、その場所に位置することができる。これは見方を変えれば、その時その時で移動しながら、その場所に成員として所属していると言える。活動の場合も同じで、目的語 NP <the students> が、<活動A> <活動B> <活動 reading three articles> と、その時その時で活動を移動する。そしてその活動に、成員が所属しているとみることができる。そのためここでは、成員 <the students> が、場所カテゴリー(活動カテゴリー <reading three articles>)に位置すると考える。このとき使役構文は、存在スキーマ(48)のカテゴリー構造を持つ。使役と言っても make のような強制的な意味合いがないのは、主語カテゴリーの対象への関与が弱いからと考えられる(破線で表現)。

最後に主語が Experiencer になる < 経験の have>(49e)がある。目的語の後ろには、形容詞、過去分詞、現在分詞、はだか不定詞が現れる((50)は中右(1998:96))。have に後続する部分は、中右は小節構造になっているとし、[ ]で表している。

(50)　a. Marion had [a child sick (in bed)].　　c. We have [someone stealing eggs (from us)].

b. The cupboard had [its door left open].　　d. John had [an extraordinary thing happen to him].

本稿の立場では、この小節部分がまさに存在構造になっており、使役構文での分析がそのままこ

こにも適用される。すなわち場所カテゴリーには、形容詞、過去分詞、現在分詞、はだか不定詞で表される＜状態＞や＜活動＞がなる。＜状態＞や＜活動＞という一時的な場所に、目的語 NP が存在していると考える。このときスキーマは使役構文同様、存在スキーマ(48)になる。存在構造となる小節部分に、主語 NP が関わる。

使役構文と経験構文の特徴の違いについて考察したい。早瀬(1994:4)は両者の特徴を次のように述べる。使役構文では「まず、have の主語は意志を持って行為を引き起こす causer であること、第二に have の補文には意図的にコントロールできる種類の event がくること。そして三つ目に have の補文の主語は自らの意志を持って行為を行う agent であること」の特徴がある。一方経験構文では、Ritter and Rosen(1993)も援用しながら早瀬(1994:6)で、have の経験構文では「core-event に対する補文主語の意図性といった制約は見られないこと、再帰的な表現が見られるのが特徴であること、更に、core-event が境界を持つ[+delimit] なものであるほうが容認される」と述べている。

両者の特徴の違いは、外側の主語カテゴリーと、存在構造との関わりからくる。つまり小節構造の特性によって、主語 NP の関わりが変わり、特徴が異なってくると考える。

使役構文では、小節構造に行為性が強いものがくる。そのため have の主語が causer になりうる有生主語が来たり、補文は意図的にコントロールできる event が来る。つまり主語 NP は[+agentive]が好まれる((51))。しかし(52)のように有生主語であっても補文の性質が[+stative]では不適格になる(早瀬 1994:2-4, cf. Baron 1974))。つまり決定権は、補文が持っている。

(51) a . Mary had me change my mind. c. *What he did had me change my mind.
b. *The confusion had me change my mind. (早瀬 1994:2)

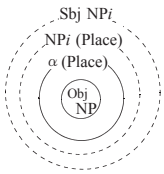
(52) *Donald had Paula know the score of Beethoven's Fifth. (早瀬 1994:2)

また三つめの特徴として、補文主語が agent であるとは、have の主語は補文内容に関わっているに過ぎず、行為の実行権は補文主語が持っていることを示している。このことは主語カテゴリーと補文内容との結びつきが弱く、(48)で破線で表記されていることからも導ける。

一方経験構文においては、補文主語に意図性が見られないからこそ、経験の意味になると言える。それは have が持っている意味ではない。また[+delimited]なものが容認されるのは、それがあると完結したものと見なされ、経験との相性が良くなるからである。

さらに解釈が使役構文か経験構文で曖昧になる場合、主語に言及する前置詞が現れると、経験構文の意味になる(早瀬 1994:5)。これは「have の主語に言及する再帰的な前置詞句が文尾に存在する、もしくは生じ」ていると考えられる。つまり再帰的になることで、抽象的な経験の場所カテゴリーが追加される。(54)では、外側から２番目のカテゴリーで、主語 NP と同一指標がついている。つまり＜その場所で＞という経験の場所が追加されるのである。そのため行為性が弱まり、経験構文としての解釈が生じると考えられる。この構造は(41)と極めて似ている。

(53) a . John had all the students walk out on him.
b . The shuttle had a meteorite crash into it.
c . John had Mary/his canary die on him. (早瀬 1994:5)

(54)


つまり have の意味の多様性は、have 自身の意味の多様性ではなく、have の補部が持つ特性によるものだと考える。そのため have 自身は存在構造に「関わる」という意味のみを持つ。

8．まとめ

ここでは存在表現と所有表現を見た。これらは関連性があることを、カテゴリーのスキーマで示した。所有表現は、存在構造を含み込むカテゴリー構造を持つとした。There 構文、場所格倒置構文、Be 存在文、Have 構文を考察したが、すべてカテゴリー構造を持つことを見てきた。そしてすべての構文、すべての用法の基礎部分に、存在構造、別様に言えば、存在カテゴリー構造を持つことを示してきた。ここでの結論が、日本語の存在表現、所有表現においても当てはまるかどうかは、今後の研究課題として別稿に譲りたいと考える。

注

*1 中右(1989)では、(5b)を Be 動詞構文のみで提示している。しかし実際は、存在・出現の動詞が場所格倒置構文に数多く現れる。そのため中右の分類を別用語にそのまま置き換えるわけではない。

*2 Levin and Hovav(1995:301)で take place など定型表現に、適格な例があるとしている。

*3 完了形の have は助動詞であるため、本稿では分析の対象には入らない。

*4 この所有の have は possess や own に置き換えできる。中右(1998:83-84)が述べるように、own は「<譲渡可能な所有> を持ち分と」し、「possess は譲渡可能な所有も譲渡不可能な所有も許容する」。

参考文献

Akmajian, A. and F. Heny. 1975. *An Introduction to the Principles of Transformational Grammar*. Cambridge, Mass. : MIT Press.

安藤貞雄. 1991.「存在文再考－2－」『英語青年』137(8), pp. 396-398.

Baron, N.S. 1974. "The structure of English causatives," *Lingua*, 33(4), pp. 299-342.

Bresnan, J. 1994. "Locative inversion and the architecture of universal grammar," *Language*, 70, pp. 72-131.

Coopmans, P. 1989. "Where Stylistic and Syntactic Processes Meet: Locative Inversion in English," *Language*, 65, pp. 728-51.

早瀬尚子. 1994.「Have 構文の event 構造について」『待兼山論叢(文学篇)』28, pp. 1-19.

一條祐哉. 2012.「英語の have 所有構文の意味の連続性」『日本認知言語学会論文集』12, pp. 178-189.

Iwamoto, E., and Kazuki, K. 1996. "On the aspectual property of locative inversion and the status of PP," *Studies in Linguistics and Language Teaching*, 7, pp. 1-14. Kanda University of International Studies.

熊本千明. 2001.「リスト存在文の解釈について」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』6-1, pp. 111-127.

Landman, F. 2004. *Indefinites and the Type of Sets*. Oxford: Blackwell Publishers.

Levin, B., and Hovav, M. R. 1995. *Unaccusativity*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Milsark, G. 1974, *Existential Sentences in English*, Ph.D. dissertation, MIT.

中右実. 1998.「BE と HAVE からの発想―存在・所有・経験の型を探る―」中右実・西村義樹.『構文と事象構造』日英語比較選書 5, pp. 55-106. 研究社出版 .

西山佑司. 1994.「日本語の存在文と変項名詞句」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』26, pp. 115-148.

緒方隆文. 2015.「There 構文のカテゴリー分析」『年報』26, 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部人間文化研究所.

Quirk, R. *et al*. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Ritter, E., & Rosen, S. T. 1997. "The function of have," *Lingua*, 101, pp. 295-321.

竹沢幸一 . 2003.「「ある」と have/be の統語論」『言語』32(11), pp. 61-68.

（おがた　たかふみ：英語学科　教授）